せたかむい
発行・古平町史編纂室
古平町文化会館☎42－2590
第126号・平成12年3月1日

年表で読む古平の歴史《33》

■戸長と戸長役場

明治時代までは、村には庄屋・名主・年寄・組頭などという村役人がおりましたが、明治五年（一八七二）にはそれらの村役人をすべて戸長と改称して、土地や住民に関する事がらをいっさい取り扱わせました。

戸長は江戸時代の庄屋や名主のように、住民の代表と考えられていましたが、郡長の下にあって、しだいに国の地方にかかわる事務を行うようになりました。

明治十二年（一八七九）十一月、これまでの戸長事務所を戸長役場と改称し、その事務は自宅で取り扱ってもよい、という通達が出され、また、次のような戸長の職務の項目が示されました。

第一　通達や住民に連絡することを町村内に示すこと
第二　土地やそのほかの税金を取りまとめること
第三　戸籍のこと
第四　徴兵についての調査のこと
第五　地所・建物・船舶・質入書への記入や、売買についての書類には、終わりに印（奥印）を押すこと
第六　地券（土地所有の証書）台帳のこと
第七　迷子、捨て子、病人、行き倒れや変死者などの事件があったときは警察官に報告すること
第八　天災や大きな災難にあって、困っている者がいたらその状況を申し出ること
第九　孝行者や貞節な婦人、そのほか模範となるような行いの者がいたらことの次第を申し出ること
第十　町村内の子供の就学を勧誘すること
第十一　町内の住民の印影（印鑑）簿を整備しておくこと
第十二　諸帳簿を管理・保存しておくこと
第十三　河港・道路・堤防・橋梁・その他、修繕や保存をしなければないものについては、どのようにするべきかを申し出ること

以上のほか、本、支庁長官、または区長・郡長から命令された事務に従事すること

戸長役場は自宅に置かれ、事務はこの項目に従って行われることになりました。

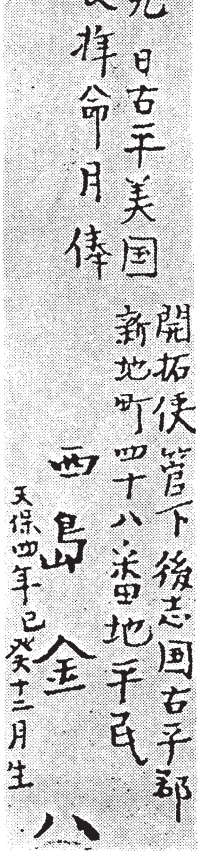
明治十三年の戸長役場は、次のように定められていました。

沖村戸長役場＝歌棄村・沢江村・沖村
浜町戸長役場＝浜町・港町
新地町戸長役場＝新地町・丸山町・入船町・群来村

三戸長役場には、戸長のほか用係・筆生・小使いの三人がいましたが、総予算が一、〇七七円余の内、給料分が七割をこえる七九四円でしたから、建築や道路関係の工事には漁場主らからの寄付が頼りでした。

ところが翌明治十四年になると、戸長の区域が二区に改定されました。

浜町・沖村・沢江村・歌棄村の一町三村戸長原田久吉
港町・新地町・丸山町・入船町・群来村　戸長西嶋金八



⇦〈戸長西島金八の履歴から〉

大正六年

6／13　午後二時から本の畑で、道庁の岡本、高木両技師から害虫駆除の薬剤の実地指導を受ける、本日から道庁で腐乱病と貝がら虫の予防規則が公布され、今後、重要なこととして励行するつもりとのことだ。

6／15　農友会の役員会と総会があり、道庁技師の実地視察に当たって案内することなどを決める。リンゴ園の改良進歩に役立つだろう、袋掛けの労賃、その他を協議して終わる。

6／17　きょうは軍人分会と同窓会の合同大運動会だ、五時ころ花火が上がる、雨もあがり晴天で、暑からず寒からず、風もなく上々の天気だ、武装をした軍人連が町を歩き賑やかだ。九時に勅語を奉読して運動会が始まる、参加者は二百人余り、午後からさらに人出があり二千人ぐらいにもなり、近年まれに見る人出であった。武装した軍人がラッパで行進するところがよかった、四十余りの種目があり、終了後に記念撮影し、すべて終わったのが六時で、大成功であった。

6／18　衛生掃除が近づいたので、家の大掃除をする、運動会の決算をするというので役場へ行く、帰ってから農園へ行って見たが、リンゴの玉も大きくなったようでこれなら大丈夫だ、出面が六人で上の畑の草取りをしている。

6／20　カレ網二百貫、コナゴも相当の漁があるとのことで人が多い。鯉もちょうどよい風で上がっている。家では四尾もつるしていよいよ賑やかだ。町では晴れ着を着て通る者も沢山いる。伊之さん、熊さんも今日は休む。店は現金で十円余り客がある。日中の暑さは実に暑中のようだ。今日は白地単衣物を着た人が沢山見えた。全て夏らしくなった。坂下君の弟が来て顔を剃ってもらう。熊さん、休みなのに畑を見て来るといって行く。帰っての話では大丈夫豊作だという。二十七、八日からナシをはじめ、袋掛けにかからねばならぬと言っている。小樽荒川リンゴ屋、昨日農園視察に来て、今年は一般に作柄が良いと言っていた。三重の会社から網の値段の通知が入る。平田が一番安いので平田に決め、注文の電信を打った。書面も出す。六時ころ自転車で、自転車競走のコースを見て回る。いよいよ明日というので、町中景気づいて来た。小樽から宮本も来ている。明日はほかにも八時ころの富丸で、小樽、余市から選手が沢山来るとのことだ。

6／24　いよいよ自転車競争当日だ、花火が上がり町中が活気づく、空は一点の雲もない青空だ、一年ごとに新手が加わり盛会である、八時半から始まったが、小樽、余市からも選手が十、五六人も来る、余興の競技もありおもしろい、賞品係もなかなか忙しい、一流の五十周レースでは〈桐沢、二等〉分、三等小山、桐沢の強いこと、皆驚いていた。

6／26　九時ころ関口局長のところで、子どもが持っていたローソクの火がカーテンに燃え移りボヤ騒ぎがある。

6／27　コナゴ大漁、鰊場のときのように干している。

6／28　リンゴの袋掛けが始まったが、夕方からポツポツ雨になる、荒川さんが来て、今年は作がいいと言う、今から売り方頼むと言って帰った。

――つづく――

北海の荒波を乗り越える

高野名幸作さんの日記から

【27】

景気がよい。

6／21　浜に出て見ると、田岸の浜でコナゴを釜で炊いている、農園へ行きキャベツ苗を植える、リンゴも大きくなった、ナシは二十六日あたりから袋掛け、リンゴは二十八日ころになるだろう。

6／30　（全文紹介）

六月二十三日　快晴　六十九度

起床五時半、この頃は早起きだ。旧四月節句というので町は

古いノートから ⑥

稲倉石の思い出つづり

富山市　高橋　藤蔵
（元・稲倉石鉱業所勤務）

※雛人形※

―（昭四十四・三記）―

昭和三十四年五月に長女が生まれ、初めて桃の節句を迎えた三十五年に雛人形を揃えた。

家が狭かったので、場所をとらないコンパクトな木目込み雛にしようか、それともケース入り雛にしようかと迷ったが、いつかは広い家に住み、祝ってあげたいとの思惑もあって、段飾りの『京雛』にした。

狭い部屋がますます狭くなったが、わが子の成長を願う贈り物として、何としても与えてやりたかったのです。

私には三人の姉妹がいた。父も母もその日暮らしの仕事におわれ、朝は、小さかった私たちが寝ているうちに出かけ、夜も私たちが寝た後に帰ってくるので、親と顔を合わせたり話を交わしたりするのは、本当にまれだった。

どんなに働いても、どんなに苦労をしても、我が家では他所なみの暮らしなど思いもよらなかったらしい。

ましてや桃の節句や端午の節句などは、きれいな赤い洋服を着ているお嬢さんや、金ボタンの服を着ているお坊ちゃまがいる、お金持ちや偉い人達だけが祝っているもので、遠い遠いどこかのお祭りとしか思っていなかった。

当然、日雇いのピーピー暮らしの我が家では、とても、そんな祝い事などは出来るはずはなかった。

しかし、春になると二人の姉が、画用紙に書いた雛人形を切り抜いて飾り、若芽の萌える頃になると、新聞紙で鯉のぼりを作ってくれた。

小さかった私は、それでも結構楽しいものだった。

ある日、身を粉にして働き夜中に帰ってきた母が、姉がつくった紙雛に安い駄菓子を供えてくれたのを見て

「他所では、きれいな着物を着たかわいい雛人形を飾り、私の家では食べたこともないお雛菓子をたくさん供えているのに、うちの紙雛はかわいそうだなあ。

一個でいいからおいしいお菓子を供えてあげたら、紙雛も喜んでくれるのに」

と、思ったものだった。

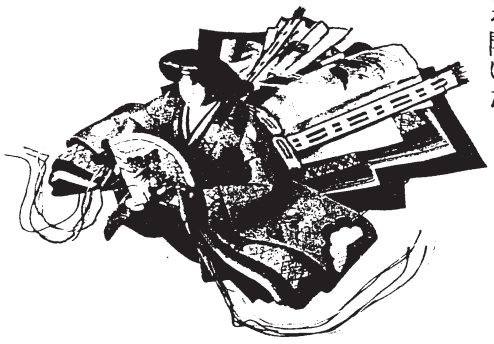
そんな子供の頃の思い出がこびりついていた私は、せめてわが子には、何としても雛人形と鯉のぼりだけは揃えてやりたかったのです。

これが、親となった私の願いの一つでした。

今年も雛祭りの季節がやって来た。

私の転勤に連れられて、暖かい内地から、見知らぬ北海道の雪深い稲倉石に住みついた雛人形が、里では春が訪れ、花も咲こうというのに、灰色の雲が垂れ吹雪が容赦なく舞う山合いの鉱山長屋で、何度目かの桃の節句を迎えた。

ふと、こんな遠い思い出が頭をかすめ、貧困の苦労が報われる事なく召されてしまった亡き父母を偲びながら、雛人形の木箱を開いた。



北海道・樺太・千島を探険
最上徳内 蝦夷草紙 3
を読んでみましょう

▼まえがきより〔三〕

【注】つづき

アイヌと農業 ＝アイヌの人たちはもともと漁労を中心とする民であるが、和人から教えられたのか、ある程度の作物を作っていたという記録がある。ただし、作っていたのはアワ・ヒエ・カブなどで、その範囲も東は白老、西は積丹から南の地に限られていたようである。農具を持っていなかったので、鹿の角や木の板などで土を掻き、種をまき、肥料はやらず除草もしないで、穀類の穂は貝殻で摘み取るのが普通で、農耕は主として婦女子の仕事であった。また、アワ・ヒエからは濁酒を造っていた。

アイヌの食事 ＝魚や獣が主食で、フレップ（ウバユリ）・キトピル（ギョウジャニンニク）・ヒシの実、そのほか種々の類・果実なども食用にされていた。南西部ではアワ・ヒエも食用にされた。食事は大鍋に雑炊として、食べるときは皆に公平に分け、来客や食物が不足したときなどは、惜しむ事なく与えるのが最高の道徳と考えられていた。酒を最も好み、また、神をまつるのに無くてはならないものだったので、交易で得た米や自分たちで作ったアワやヒエで濁酒を造った。タバコも好きで、米・こうじ・酒とともに交易品の中で多かった。

アイヌの服装 ＝衣服は鹿・熊・海獣などの皮や魚皮・鳥皮などで作ったものが使わたが、草木の繊維で織ったアッシ・イタラッペというようなものを縫い合わせ、刺しゅうなどをしたものが一般であり、和人から交易で得た衣服や、山靼人（サンタン人：樺太対岸のロシヤ領に住んでいた民族）からの蝦夷錦という布地で作られたものが貴重品とされ、儀式のときに着用された。交易が盛んになってくると、和人がアッシや獣皮を珍重したため、これらと、和人が持って来る古着や木綿の衣服と交易し、儀式にも使われた。アイヌの人たちの本来の衣服は丈が短く、すね当てを着け、女子は鉢巻きで頭髪を巻いている。履物はケリといって、アザラシやサケの皮、ブドウづると木の皮などで作ったものがあるが、特別のとき以外は使わず、ふだんははだしであった。

交易での物々交換 ＝場所請負人は運上屋に支配人・通辞・帳役・番人などを派遣して、米・酒・こうじ・塩・鍋・タバコ・〕小刀・針・古着・反物・漆器・耳輪・きせるなどを送り、アイヌの人たちが漁や狩猟で得た品物や手工芸品と交換した。ただし、軽物といわれた熊皮・熊の胆・ラッコ・アザラシの皮・オットセイ・山靼錦・玉などは、幕府への献上品となっていたので交易は許されなかった。

交易にはいっさい金銭は許されず、物と物との交換であったが、米がその交換の基準になっていた。

米は一俵が単位であったが、その一俵の中味は次第に少なくなっていった。最初は二斗（三十キロ）入りだったらしいが、後には八升（十二キロ）が定量となった。

元禄元年（一六八八）、水戸藩の快風丸が石狩に来て交易したときは、米一斗二升（十八キロ）で鮭百尾と交換したというが、それが当時の標準的な比率であったといわれていた。

それが寛政二年（一七九〇）には、米一俵（八キロ入り）で干鮭・干鱈は各七束（一束は二十尾）、生鮭は五束であったというから、アイヌの人たちにとっては倍以上の負担となった。

アイヌの人たちへの品物は、蝦夷向きということで甚だしく粗製品が多く、また、松前藩では、武器として使われるのを恐れて鉄製品を渡すことを禁止していた。

―― つづく ――

断章小説【ふるさと遥か】

反抗の軍歴 Ⅵ

土口川　美我雄

平和の島、沖縄の海も山も燃え尽きようとしていた。

偵察機彩雲が、火線の中を必死で撮影して来た写真は、指令部の床の上に並べられ、戦争の愚かしさを如実に訴えていた。

吉野兵長の航空隊にも、急遽山岳地帯に陣地を造るよう命令が出された。この島に敵がやって来たときの備えであり、もう海軍も陸軍も差別はなくなっていた。上層部がいくら空威張りをしても、敗戦は濃厚であり、誰よりも第一線の兵たちはそれをよく知っていた。

ほとんど飛行機を失くした航空隊もその思いは例外でない。

夜の暗がりの中を、トラックを連ねて部隊は山岳地帯に入って行った。

せっかく密林を切り拓いて造成したパイン畑が、今は無人のまま自生して広がり、その丘の下にはどこに通じているのか、この島の幹線道路らしく、その路に沿うように連なる丘の上に塹壕を掘り、要所に機銃陣地を造れというものである。

以前、陸軍も来て途中で止めたらしく、粗末ながら少し手直しすれば使える宿舎も何棟かあって、顔なじみの航空隊の兵ばかりの一部落がすぐ出来上がった。

土木作業なんかさせられたことのない海軍兵、それも空軍というプライドも残っているし、何よりも眼前に敵を迎えているわけでもないから、下士官も兵も文句ばかりで横着になっていた。命ぜられた仕事は遅々として進まなかった。

陸軍の残した陣地を手直しに行けば、材木の下からおびただしい数のサソリが、毒針を逆立てて出て来るし、新しく壕を掘り進めば、その中に、二メートルものコブラが落ち込んで来て立ち上がり、毒々しい首の斑紋をひろげて威嚇し、兵たちを悲鳴と共に四散させた。

学徒出の将校なんか、誰一人現場に来ることはないし、こんなハプニングの後は、下士官も兵も、仲良く煙草を分け合って休憩に入り、炎暑を避けて長い時間を楽しんだ。

山に入ってから予想外の気楽な生活であったが、将校たちの中に一人の準士官が赴任して来たときから、あっさり崩れた。

兵士あがりの将校には、兵の苦労をいたわる者と、逆にいじめて楽しむ者の二種類がある。不幸にも、やって来たのは後者だ。

何を意気込むのか、目を光らせ、長い竹のムチを振り廻しては兵たちを休まず働かせた。

炎熱の中で、奴隷に早変わりした兵たちは次々に倒れ、兵の間には、一気に反抗のきざしさえ見せ出した。

「吉野、お前にだけは言うが、明日の朝あれをヤル。ただし参加は下士官だけだ。お前は後のことを頼む。」

先任下士官で人望ある中村兵曹から打ち明けられとき、吉野兵長は武者振いした。「人を人とも思わぬ奴は、こっちもそうしてやる。」そう宣言して、何かやりそうな気配をみせていたのは、吉野兵長自身だったのだ

准士官は、山の宿舎などには寝泊まりせず、街道筋の部落の中に妾宅を構え、毎朝登って来ていた。

待ち伏せにあって襲われ、散々なぐられたあげく、十数人の下士官たちの軍刀の下で、土まみれの姿で平伏して命乞いをする准士官の姿は、惨めより哀れなものだと、吉野は思った。

振り向いた中村兵曹が、ニヤリと、吉野に成功を知らせた。

数日後、喜怒哀楽の吹き抜けた丘の上にも終戦が知らされ、完成近い塹壕が密林に穴を開けまるで青春のエアポケットみたいになった山を後にした。

この稿終わり

遥かなる故郷の思い出

わが闘病日記 ⑫

[63]

橘 義春

八月二十四日（土）

体に二十四時間心電図取付けをする。今日から三種類の薬剤を使用する。脳の代謝を良くするための薬・TA129、血液をさらさらにするという薬・PN100、胃の薬・SX－FGなどである。

今日からトイレまでの一人歩きを許される。

八月二十七日（火）

午前、心臓のエコー検査をする。午後、心臓の動きが早くなり、不整脈の点滴を始める。新しい注射のテスト結果は良好であった。

八月二十八日（水）

午前、胸部CT検査をする。検査室まで女医の堀先生が、車椅子を押して同行して下さり申し訳ない。

午後、心電図検査をする。ちょうど教授先生方の回診があり、ぞろぞろと病室に入って来る。

その後、岡部先生から、私の病状についての詳しい説明があった。救急車で運ばれて来たときは左の心臓が大きく肥大していて、まるで水を含んだようにブヨンブヨンになっていた。心不全を起こしていて危ない状態だったと言われた。

ひょっとすると脳梗塞で倒れる前に、心不全でバタンキューだったかも知れない。ここでも死神より、私の方に軍配が上がったようだ。

心臓の方は洞不全症候群で、心臓の動きが早くなったり遅くなったり、そして止まってしまうこともあるという。これはアダムスストーク症候群といって、心臓が七秒以上停止すると失神発作が起きるらしい。今まで何回も心神発作て倒れているので、よくもまぁ無事でいられたものだと、自分の生命力の強さに感心している。

そのほかに心臓の悪いところは心房細動、狭心症、脚ブロック（右）、期外収縮といろいろある。

岡部先生と堀先生から、人工ペースメーカーを埋め込むことを提案された。私なりに医学書を読んで、ペースメーカーのことは知っていたので早速両先生にお願いをした。これで、心臓の鼓動のリズムの乱れがなくなり、失神で倒れるような心配もなくなるかも知れない。

八月二十九日（木）

採血検査をする。（堀先生）

八月三十一日（土）

午前、体重測定をする。六十二キロ、入院したときより三キロやせた。午後、堀先生から知能テストを受ける。

九月一日（日）

岡部先生から、ペースメーカーの埋め込み手術が三日に決まったことを知らされる。

九月二日（月）

午前、頭部のCT検査。午後に胸部のレントゲン検査がある。

九月三日（火）

胸部、左乳の上にペースメーカーの埋め込み手術をする。四人の先生で、局所麻酔をして行ったので痛くはなかったが少し苦しかった。人工ペースメーカーは小判形で、厚さは五ミリぐらいのものであった。左乳の上部を切開して、その中へペースメーカーを親指でぐいぐいと押し込んでいくのである。レントゲンを見ながらの手術なので、先生方もさぞ大変だったろうと思う。ご苦労さまでした。

さぁー、これからが私の方が大変だった。人工ペースメーカーを埋め込むと、左腕は一週間ぐらい動かしてはいけないという。そのために、左腕はバンドで体に固定されてしまう。これには参ってしまった。左腕を固定されてしまうと、ベットから起き上がることもできない不自由な生活となる。

―― つづく ――

客馬車の思い出

竹内コト

昭和十二、三年ころのことです。私は小学校を卒業して間もなく、札幌に出ることになりました。小黒さんという材木商の家でしたが、行儀見習いということで奉公に行きました。

そのころはすでに、日中戦争が始まっていましたが、やがて太平洋戦争へと広がって、生活用品や食料も不足し、生活も次第に不自由になってきました。

そんなとき、ある日突然、家から「古平へ帰って来なさい」という手紙が来ました。何でも、女子挺身隊というのができて、工場などへ働きに行かなければならなくなったというのです。

こんな時代ですからどうなるのか分かりませんでしたが、止むを得ず、小黒さんのところを去ることになりました。

札幌駅から汽車に乗り、余市の駅で降りて駅から出ると、そこに待っていたのは客馬車だったのです。首に鈴をつけた馬が、古い自動車を改造した馬車を引っ張っているのです。エンジンを取り外してそこに馬車屋さんが乗り、五、六人の客が座席に乗ります。手荷物は馬車の後ろの台や屋根の上に積み、荷物を運ぶ料金を払えば客は無料なのです。客がいっぱいになると、モイリ岬の桟橋まで歩き出します。このいっぷう変わった乗り物は、馬動車というそうですがおもしろい乗り物でした。

また、汽車が遅れたりして、このままでは船に間に合わないようなときには、勢いよく鈴を鳴らしながら馬が駆け出します。駅から桟橋までは一キロ以上もありましたから、ほんとに便利な乗り物でした。当時、その馬車をやっていた人の中に、たしか松山さんという人がいたように思います。

そのころは桟橋の手前に小原さんという回漕店があって、そこで定期船に乗る人たちが待っていました。古平・美国方面へ行く人たちで顔見知りも多く、ここまで来ると、もう古平に来たようでほっとします。

余市・美国間の定期船は、そのころは蛟龍丸と金華丸という、同じような大きさの二隻の船が航行していたようで、午前と午後の二回往復していました。客馬車は船から上がったお客さんや荷物を積んで、また駅へ向かいます。冬になると馬動車に代わって、箱に幌をつけた馬そりが走ります。

古平と余市間の交通は、ずうっと船でした。夏の間だけバスが通っていましたが、料金も高かったので、多くの人は船を利用していました。夏は船も快適でしたが冬の時化のときは大変で、船に弱い人にとっては地獄の苦しみだったようです。今は交通も便利になりましたが、時々、むかしの不便だった時代のことを懐かしく思い出しております。

川柳

石井愛子

喜寿を越し身の衰えに歯がたたず

懐メロに若い私がそこに居る

孫と呼ぶこんな幸せ祖母にくれ

北政道

多数決ここが野党の泣き處（なきどころ）

要介護みんなで助け合う保険

低金利いつまで庶民いじめる気

少子化と対照的な長寿国

耐えてきた人生なのに先細る

古平町岬短歌会詠草

竹富島の一つポストに並び建つ年賀葉書売出しの旗　東　美知
愛しきは紫影草瓶にありても夕べには閉ぢ朝に開く　鈴木時子
秋深く季節はづれに啼く蝉は六度なきてはたと啼き止む　竹内コト
日の射してブリッジの窓煌めきぬ藍色ふかき湾を出る船　堀　典子
わが体重減らす汝の献立よく多く食べつつ予定に達す　池田テル
新潟は母のふるさと幼な日に遊びし山河を生き生きと話す　丹後初江
恩師より届きし包みのエプロンはハイビスカスの紅き花柄　田中香苗
暑き昼うとうと寝ねし背の風に覚むれば団扇煽ぐ子の居り　菅原節子
谷間より湧き上るごと現はるる蜻蛉の羽の色まだ淡し　奥山きよみ
くっきりと姿を見せし羊蹄山孫住む地なれば親しさの増す　榊　佳代
雪しまく夜の参道帰り来ぬ社のみあかり幻想を呼ぶ　山口スエ

古平ホトトギス会

鎮もれる琴平神社冬木中　斉藤波留
虹色に映ゆる氷柱の朝日かな　関口勝志
肩の雪払いつ通夜の人混めり　山口悦子
露天風呂雪のあかりに身を沈め　よしざきり
アマリリス二輪開きて喜寿祝う　越野敏雄
船体の氷落しの寝ずの番　仲谷比呂古
木の個性風の個性の雪景色　大和田絵伊
うそ寒や湯上りあとの寝酒のむ　越野清治
外国の人をもてなす鯨汁　福井幸平
室咲きのアザレア窓に置いて見る　室谷弘子